
機動戦士ガンダム 0079 - 宿命の双星 - (仮題)

まさきち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム0079 宿命の双星（仮題）

【Nコード】

N7965K

【作者名】

まさきち

【あらすじ】

もしもあの、アムロ・レイに兄貴がいたら…？
そんな宇宙世紀の【IF】を想像して書いています。

アムロ・レイの兄、【タクマ・レイ】は1年戦争の勃発前のジオン軍に入隊する。

彼の存在がどう1年戦争の歴史を塗り替えて行くのか？

果たして作者は無事完結まで辿り着けるのか？

生暖かい目でご覧下さい。

プロローグ（前書き）

お読みになる前に

この作品は「機動戦士ガンダム（1st）」を原作とした【2次創作小説】です。

原作の設定やら登場人物やら露骨な改竄が筆者も気付かない内に行われたり、筆者の稚拙な文章力やらで、読者の方に予想外の嫌悪感を与えてしまう可能性があります。

また、この作品は「もしもアムロに兄がいたら」という、筆者のしようなない発想の産物です。設定に危機感を感じる方もいるかもしれません。

以上の内容に許容出来る方のみお進み下さいますようよろしくお願い致します。

プロローグ

増え過ぎた人類が宇宙に進出するようになってから、既に半世紀以上の時が経っていた。宇宙に浮かぶ巨大な人工棟「コロニー」では既に80億人以上の人間が生活し、子を産み、そして死んでいたのだ。

この物語は宇宙世紀0073。「バーン」と呼ばれるサイド1コロニー群のある片隅、ある一家から始まる。

機動戦士ガンダム

【宿命の双星】

epi.000

《プロローグ》

「タクマ。あなた本当に家を出て行くと言っの？」

「……………」

母さんの言葉に対し、俺は無言の頷きを持って答える。これは、前からずっと考えていた事だから。俺の意思は堅かった。

「わかつているの？あなたの行こうとしているサイド3は「ジオン」なのよ？」

「だからこそつていうのもあるんだ。ジオンは今、連邦からの圧力に対抗するために、サイドの拡張やら資源衛星の整備の関係で、移民をかなりの良い条件で募集している。チャンスなんだよ。」

「…………でも！タクマが出ていったらアムロも悲しがるわよ。」

「母さん。タクマも男だ。自分で決めた事なんだから、好きにさせたら良いだろう。それにタクマが出て行って寂しいのは母さんの方じゃないのか？」

親父が助け舟を出してくれる。親父は「苦労は買ってでも経験しろ！」という教育方針で、今回の事もいち早く賛成に回ってくれていた。

「とにかく、手続きやらなんやらも終わらせちゃって、俺はもう出発を待っている身なんだよ。ちゃんと、たまに連絡するからさ。母さんもそんな心配しないでくれよ。」

母さんは未だに不満そうな表情を隠そうとしていなかったけど、とりあえず文句を言う事は止めたようだった。

俺は1週間後、サイド1を発ち、サイド3の「ジオン共和国」へ移民する。

俺の名前はタクマ・レイ。15才だ。

親父と母さん、そして弟のアムロ。一家4人でサイド1に暮らしている。と言っても前述した通り俺はすぐにいなくなってしまうが。何故俺が日本人っぽい名前かと言うと、じいちゃんが生粋の元日本人だからである。

ばあちゃん是中国系の人間で、じいちゃんが婿入りした関係で親父に「テム」という名前を授けたが、孫、つまり俺が産まれる時にどうしても日系の名前を付けてくれ！と、じいちゃんが親父にせがんだ結果が俺らしい。

母さんは東欧系の人間だが、どうもレイ家の血筋はモンゴリアンが優勢らしく、今の俺ってのは、じいちゃんの若い頃にそっくりらしい。

弟のアムロもしくり、非常に東洋人っぽい顔立ちをしている。ま、

あいつは母さんと同じで天然パーマだけだね。

親父は研究所勤めの技術者で、なおかつ転勤が多かった。俺は元々地球のヒロシマで生まれたが、色んな場所を転々として、今はサイド1にいる。

短ければ数ヶ月、長くても数年ですぐ引越してしまう事が、俺も嫌だった。おかげで友達もあまり出来なかったし、正直なところ、その事が俺のサイド3行きを決心させた1つの要因でもあった。母さんも未だに慣れていないらしく、転勤の度に親父と喧嘩をしている姿をよく目にしていた。

俺は、このサイド3行きに関して1つの決心をしていた。心配症の母さんには絶対に話せない事ではあるんだが、俺はサイド3に行ったら、ジオン軍の士官学校に入る予定なのである。

勿論最大の理由は、学びながらにして給金が貰えるという事が一番。通常のハイスクールでも奨学金制度があって問題はなかったが、次点の理由として、軍隊に入った方が若い内に取りれる資格が桁違いに多いという事だ。作業用モビルポッドの操縦資格や、宇宙艦艇の操舵免許があるだけで、俺が将来食いつぶされる危険がかなり減る訳である。

ま、秘密で受けていた選抜試験に受かってしまっていた。というのが、裏の理由で存在していたりする。

最近では、ジオン政府と地球連邦政府との対立が表面化してきていて、少しキナ臭い情勢になっていたりするのだが、边境のサイド国家であるジオンと地球連邦では、国力が違い過ぎる。まさか戦争をふっかけるなんて事はないだろう。なんてふうに考えていた。

結果だけ言えば、この時のタクマの予想は大きく外れていた。しかし、これから10年もしない内に、人類が半数も死に至らしめる程の戦乱を経験するなど、誰も予想出来る事ではなかったのである。

宇宙世紀73年の3月某日。とうとう俺がサイド3に旅立つ日が出来た。

サイド1の宇宙港には、親父、母さん、そしてアムロ、一家総出で俺を見送りに来てくれていた。

「……タクマ、本当に行ってしまうんだね。」

母さんは涙ぐみながらも俺を抱きしめてくれる。流石にグッと来るものはあるが、シャトルの搭乗手続きも終え、もう俺は戻る事は出来ない。

「そんな顔しないでくれよ母さん。ちゃんと向こうについたらメル入れるし、たまには里帰りするから。それで勘弁してくれよ。」

「体には本当に気を付けるんだよ。」

「ああ、母さん。ありがとう。」

「兄さん。また、会えるよね？」

「ああ、勿論さ。アムロ。でもこれからはお前1人だから、もう俺を頼る事は出来ないからな。しっかりやれよ。」

「うん。わかってるよ。」

アムロは今年9才になる少し年の離れた弟だ。内向的な性格で泣き虫で、前はよく俺に怒られていた。でも俺がサイド3に行く事を話してから、あまりそのような気がなくなった。俺がいなくなつて自分がしっかりしなきゃいけない事を理解しているのだろう。これなら大丈夫だな。

「そうだアムロ。お前には餞別がある。」

俺はバッグから丸い物体を取り出し、アムロに手渡す。

「兄さん、これは？」

「【ハロ】って名前を付けた。俺が組み立てた、自律AIを搭載したロボットだ。今は目覚まし時計ぐらいにしかないけど、お前の得意な機械弄りで成長させてやってくれ。」

「わかった。ありがとう兄ちゃん。」

「…タクマ。」

一歩下がった位置にいた親父が、俺に近付いて来る。

「今、お前は新天地に向けて夢も希望も溢れているだろう。しかしな、いくらお前がジオンの人間になるとはいえ、それ以前にお前は俺の息子だ。ヤバくなったらいつでも戻って来い。」

「ああ、親父。今まで世話になったな。ありがとう。」

「それでな。お前にも餞別だ。…母さん、渡してあげなさい。」

「タクマはしっかりした子だけど、向こうで何があるかわからないからね。ほら、ちゃんと持ってるのよ。」

そう言って、母さんが俺に渡したのは、なんてことはない。ただの【お守り】だった。

「サイド1には神社なんてものはないから、母さんの手縫いだけだな。俺もお前も無宗教だが母さんは信じれるだろう。しっかり持つて守って貰え。」

「ああ、親父…、母さん…。本当にありがとう。」

両親の心遣いが、ただただ嬉しかった。下手したらこれで最後と思うと、涙が出てきそうになるが、堪える。

「それじゃあ、行つて来ます!!」

「ああ!行つて来い!」

「向こうに着いたら必ず連絡入れるのよ!」

「兄ちゃん！元気だね！」

お互いに手を振りながら、俺は家族の元を離れる。搭乗ゲートを通過すると、俺は振り返らずに進み、そのままシャトルに乗り込んだ。

泣く事なんてないと思っていたんだけどな。結局堪える事の出来なかった涙を、家族に見せなくなかったんだ。さようなら。母さん、親父、アムロ。

（タクマ。これからどうなるかはわからない…。必ず無事でいるんだぞ…。）

サイド1宇宙港から飛び立つシャトルを見送りながら、テム・レイは息子の無事を祈る。

彼は軍関係の技術者であり、最近のジオンの動向から、戦争の可能性を現実的に考える事の出来る、数少ない1人であった。

【人物紹介】

タクマ・レイ

TV版1話時点で20才

アムロの兄。

身長174cm

体重60kg

not天然パーマ

性格はしっかりもので真面目ながら、ユーモアな態度を取る事も可能で、人付き合いも悪くない。

彼がどのような立ち位置で、どう物語を変えて行くのかはまだ内緒。

アムロ・レイ

ご存知最強のニュータイプ。この作品では兄貴がいます。

テム・レイ

2人の親父

カマリア・レイ

2人の母親

プロローグ（後書き）

これは、数多くある2次創作作品の中でも「i f」と呼ばれる作品群の1つとなります。

「バタフライ効果」と呼ばれる物語の変化を楽しむものですが、いきなりこんな大風呂敷を広げて、どうなっちまうか筆者にも一切わかりません。

とりあえず今後も頑張って書いて行こうと思いますです。

ジオン士官学校編 1

俺は今シャトルに乗り込み、サイド3に向かっている。サイド3は、俺の住んでいたサイド1の正反対、月の裏側にあり、地球から一番離れた宇宙コロニー群でもある。

だからこそ、地球連邦から独立を目指そうという動きが早期から始まっていたのではないかと推定出来る。

実際、このジオンという名の元となっている「ジオン・ズム・ダイクン」は元々、【コントリズム】という、各コロニーに自治権を持たせ、サイドを1つの国家として扱う事を提唱していた政治家であり、それを拡大発展させたモノが【ジオニズム】と言える。

実際、サイド3はダイクンと、その影響された人々の尽力により、いくら今現在、地球連邦に経済制裁を受けているとは言え、その国力は他のコロニーを大きく上回るのである。

まあそれでも、地球連邦にはまだまだ適わない。元となる人口の数がそもそも違う訳だから。

運良くシャトルの窓際の座席であつた俺は、だんだんと大きくなって来るサイド3独特の【密閉型コロニー】を見ながら、そんな風に少々小難しい事を考えていた。

いや、俺はこれからあそこで暮らすんだ。このくらいはしっかり勉強しておいたのさ。

機動戦士ガンダム

【宿命の双星】

e p i . 0 1 《ジオン士官学校編》

サイド3の宇宙港に降りた俺は、入国審査を済ませて士官学校の寮舎に向かっていた。

サイド3は前述した通り密閉型コロニーで、以前住んでいたサイド1に代表される【開放型コロニー】とは少々違う。

開放型コロニーは太陽光を集光ミラーを使って集める事によって居住区に光を与えている訳だが、密閉型コロニーは内部に設置された【人工太陽】を使って居住区に光を与えるのだ。

更に人工太陽は核融合反応炉であり、それ自体が発電所の役割もしていて一石二鳥という訳だ。実際、核融合が実用化されてから、地球のエネルギー事情はだいぶ改善されたという話である。

少し話がそれたが、密閉型コロニーであるが故にサイド3には面白い景観がある。

【地平線がない】のだ。どこまで見渡しても街並みが続き、少し眩しくて見づらいが、見上げると、上空にも街が並んでいるように見えるのである。きっと地底世界であるラ・アスもこんな景色が拝めるんであろうね。

士官学校の寮は、勿論ながら士官学校の敷地内にあつた。軍隊だから当然ではあるけれど、朝が少々弱い俺には助かる事この上ない。手続きを済ませて入寮すると、自分の部屋には先に送っていたダンボールが積まれていた。

見覚えのない荷物もいくつか置いてあつたが、それは相部屋となる奴のモノなんだろう。

ちなみに寮は2人部屋であり、相方となる人間によって、俺のこの3年間の命運が決まると思つても過言ではない。案内してくれた係の方に聞くと、相方となる奴は明日にも入寮予定らしい。まだ見ぬ相方を勝手に想像しつつ、俺は荷ほどきをし、家族に無事に到着した事を伝えるメールも入れて、サイド3での初日が終了するのである。

翌日、俺と同室となり、滅多な事がなければこの3年間共になる相方がやって来た。

「シャア・アズナブルだ。よろしく願います。」

偉いイケメンがそこにいた。

「あ、ああ…タクマ・レイだ。よろしく。」

俺は少々しどろもどろになりながらも、握手に応じる。憎たらしいぐらい奴はイケメンだったのだ。

俺も容姿は悪くはないだろうなあぐらいには思っていたのだが、この目の前に立つ金髪碧眼は完璧と言えた。俺に立つ背はない。

「あ、えーと。悪いけど先に来たからベッドは下を使わせて貰っているよ。シャア君は上で構わないかな？嫌ならじゃんけんで決めるのなら良いよ。」

何故か良い子ぶる口調を使ってしまう俺。思ったより俺はヘタレなのかもしれない。

「ああ、君が下が良いなら私は上で大丈夫だ。あと私の事は呼び捨てで構わない。」

「わかった。俺もタクマと呼んでくれ。（あんまり悪い奴ではなさそうかな？）」

その日はシャアの荷ほどきを手伝いながら、当たり触りのない会話を繰り返して終了する。

俺はシャアに対して、同い年にしては随分しっかりしていて、かなり真面目な奴なんだろうな。という印象を受けていた。しかしながら、【私】って一人称はどうかとも思う。

まあシャアが俺自身に対してどんな印象を持っていたか、なんてのはこの時の俺には知る由もない。

後にシャア・アズナブルは「赤い彗星」と呼ばれ、地球連邦、ジオン両軍の兵士にとって超有名人となる訳である。

タクマ自身も、相部屋として一緒に住むシャアが、そのような逸材であつただなんて、この時の彼は予想も出来る訳がない。

しかし、それはシャアにとっても同じ事である。

翌日は、シャアと2人で足りなくなりそうな生活用品の買い出しに街に出ていた。

聞く所によると、彼も俺と似たように、地球やらサイド6やらを転々としていた過去があり、元々の生まれがサイド3だったと言うことだ。

市街の案内はシャアに任せたが、やはりサイド3は彼にとって久々であり、色々違う所があると驚いていた。

サイド3の中心地と呼ばれる所は、西洋的なバロック形式の建物が並び、それは貴族趣味丸出しのモノである。

この街並みは、シャアがサイド3を離れてから大きく変わった内の1つであるらしい。」

「これはザビ家の趣味の1つなのだろう。元のは奴らは、寂れたコロニー外壁工の出身だ。立身出世の証だとも思っているのだろうな。」

とシャアは語る。

「なんだ、随分とザビ家について詳しいじゃないか？」

ザビ家とは、死去したジオン・ズム・ダイクンに代わってサイド3を治める一族である。

デギン大統領は勿論の事、彼の長男ギレンはジオン国防軍の総司令官であるし、その他一族も軍部や財界にて要職を占めているという話だ。

「サイド3に住んでいる人間なら誰だって知っている事さ。」

「そうなのか。」

ま、つい一昨日までサイド1にいた俺には、正直疎い話である。

「……ザビ家め。俗物が。」

シャアが誰かに聞かれたら非常に困るような言葉を吐き捨てた気がしないでもないが、俺は聞かなかった事する。

シャア・アズナブル。端正なツラをしときながら、もしかしたら、かなり物騒な男かもしれない。

俺はこれからコイツと3年間も共に過ごす。なんだか頭が痛くなりそうだった。

「栄光なる我がジオン軍士官候補生の諸君。私は君達の入学を心より待っていた——」

士官学校の入学式である。流石に今までの学校のように、校長やらPTA会長やらからの、やたら長い説法を聞かされる訳ではないが、代わりに聞かされるのは、国防を司る要人からの訓示であった。

今、壇上に上がっているのはギレン・ザビ国防軍総司令官である。まさか、たかが士官学校の入学式に軍のトップが来るなどとは思ってもしなかった。

それは隣に座るシャアも同じであつたらしく、彼は随分と神妙な顔つきをしていたのだった。

士官学校の入学式が終わる。これからの訓練に備えるために、シヤアと共に一旦自室に戻ろうとしていたのだが、その中で俺は、もう一つ新しく、またあまりにも予想外な出会いをする事となる。

「キャスバルっ！！キャスバルじゃないかっ！？」

俺達の背後から声が掛かる。キャスバルって誰だよ。俺は明らかに人違いに無視をしようとしていたのだが、シヤアは振り向くのだ。

「…………ガルマか？」

ジオン士官学校編1（後書き）

とりあえず書き上げた分まで投下。

ジオン士官学校編 2

「…………ガルマ？」

「ああ、ガルマさ！久しぶりじゃないかキャスバル！まさか君とこんな所で再開出来るとは思っていなかったよ！今までどこにいたんだ？何故ジオンの士官学校に？」

シヤアにガルマと呼ばれた奴は、何か興奮しているようで、シヤアに対して次々と質問をぶつけて行く。

対象的にシヤアは困惑した表情で、どう返答するか迷っているように見えた。

仕方ない。助け舟を出してやるか。

「ちょっと待ってくれよ。ガルマ君、だっけ？こいつは名前はシヤア・アズナブルだ。人違いなんじゃないの？」

「え？違うのかい？君はキャスバルだろ？」

「…………。俺は違うと思うけど？シヤア？」

「いや、私はまさしくキャスバルだ…。久しぶりだなガルマ。まさかザビ家の末男である君が士官学校に入学していたとは誤算だった。

」

「…………はあ？」

今度は俺が意味がわからずに首を傾げるハメになってしまっている。シャア？キャスバル？目の前のコイツは名前を2つ持っているとしても言うのだろうか？

「それとな、タクマ。耳を貸してくれ。」

「なんだってんだよ？」

ゴニョゴニョとシャアが耳打ちする。

（タクマ、君はまだサイド3に来て間もないだろうから、知らなくて当然だが、このお方はだな……………。）

内容を聞くにつれて、俺は体温が急激に低くなって行くのを感じていた。

（え、ええええええええ？この貧弱そうなぼーやがザビ家の嫡男！？）

シャアの耳打ち終了と共に、俺はガルマに対して直立不動の姿勢を取る。

俺は基本的に権力に対しては従順だ。文句あるか。早速先ほどの非礼に、早く許しを得なければならぬのだ！

「ガルマ様！先ほどは、数々のご無礼大変失礼致しました！私の名前はタクマ・レイともうし……………」

「ちょ、声がでかい！僕はあまり周りに悟られたくないんだ！」

そう言いながら、ガルマ様は慌てて俺の口を押さえる。ちよつとびっくりした。

「……落ち着いたかい？僕は確かにガルマ・ザビだ。でも父上の事は気にせずに、普通に接して欲しい。」

あ、そう。本人がそう言うなら気にしなくて大丈夫だね。

「わかった、改めて俺の名前はタクマ・レイだ。タクマと呼んでくれ！」

「あ、ああ。僕の事もガルマで構わない。よろしく。（なんだコイツ、変わり身はやっ）」

これが俺とガルマの、ファースト・コンタクトであつた。そして、俺には看過出来ない疑問がもう1点あるのだった。

「んで、お前はなんなんだ？シャア？キャスバル？どっちが本当の名前？」

「ああ、それに関してはガルマも交えて部屋で話したいと思う。ガルマ、悪いが私達の部屋に来て貰っても良いか？」

「ああ、構わない。」

こうして俺達の部屋のお客様第1号は、恐れ多くもガルマ・ザビと相成つた。

そして俺は、早くも謎の多い男と俺から認定されるシャア・アズ

ナブルから、更なる驚愕の事実を知らされるハメになるのである。

「え？何、つまりお前の本名は【キャスバル・レム・ダイクン】であつて、あの【ジオン・ズム・ダイクン】の息子さんって事？」

「ああ、少々事情があつて、今はシャア・アズナブルと名乗っている。タクマも今まで通りにシャアと呼んでくれるとありがたい。」

「なんてこつたい。」

昨日に感じた、頭が痛くなりそうな予感は今早くも現実となつてしまふ。よりによって俺の周りに、サイド3を代表するボンボンが2人も現れたからだ。

しかし、まあこいつらが、それを鼻にかけて偉そうな態度を取るような奴らではなかった事は幸いと言えるんだが。

ちなみにガルマはシャアの説明に不満があつたようだ。

「しかしキャスバル。何故君が偽名を使う必要がある？父上も君がサイド3に戻つた事を知れば、きつとお喜びになるに違いない！」

「甘いなガルマ。それは表面的なものに過ぎない。幸い君は私の親

友だと言ってくれるが、ザビ家が私の存在を知れば、全力で私を消しに来るだろう。」

「何故だ！僕には理解出来ない！」

「仕方がない。ガルマ、落ち着いて聞いて欲しい。」

ここからシャアが話す事は、しがない技術者の息子という、その辺りに転がっているような家庭に生まれた俺には想像すら出来ない事だった。

シャアは、自らの親父の死の詳細、その後、代わってザビ家がジオンで成り上がった事、そして、自分がザビ家によってサイド3を追放された事を、ガルマに話す。

「そんな…。まさかダイクン様は、父上に暗殺されたというのか。」

当時はまだまだ幼少で、政治家の汚ない裏側など知る由もないガルマにとっても、シャアの告白は驚愕であったようだ。

てか、俺もちゃっかり聞いてしまっていて、色々と驚いていたんだが大丈夫なのだろうか？まあ、今更か。

全てを話したシャアは、一呼吸置くと、ガルマに対してこう諭す。

「だから私は、ここでダイクンの名前を使う事は許されないのだ。ガルマ、私も君の事は親友であると認識している。どうか私の事を信じて、誰にも言わないで欲しい。」

「そうか…。すまなかったキャスバル、いや、シャア・アズナブル。しかし……。いや、これ以上の詮索は止そう。僕は君を信じる。シャア、これからは、お互い良い関係を築いていこうじゃないか。」

ガルマはシャアに握手を求めて手を差し出すと、シャアもそれに答えてがっちりと握手をする。

これは感動的な場面と考えて良いのか？なんだか俺には非常に場違いな気がしないでもない。

「それと、タクマ。」

「へ？」

ガルマは俺に対しても握手の手を差し出すのだ。

「僕は、今までザビ家の息子という事で、周りの誰からも腫れ物のように扱われ、恥ずかしいがシャア以外に親友と呼べる友達がいなかった。だけど君なら平等に接してくれると思う。僕と友達になつてくれないか？」

「あ、ああ、それは勿論だ。こちらこそよろしく。ガルマ。」

正直困惑していたんだが、この場面で拒否出来る奴がいたら教えて欲しい。

ま、断る理由なんてのも一切ない。将来の出世が有利になるかも…だとかいう事も俺にはあまり興味はなかったし、打算は一切抜きに、俺はガルマに応えてがっちりと握手を交わしたのだった。

「ところでだな、ガルマ。お前に1つ提案がある。」

「どうしたんだタクマ？」

「ザビ家の息子である事を隠したいんだろう？シャアみたいに偽名

を使ったらどうだろう。きっと第1印象で相手を引かせる事はほとんど無くなるぞ。」

「なるほど、単純ではあるが、それは思い付かなかった！早速兄上に申請してみる事にするよ！」

こいつ、思ったよりかなり単純なのかもしれない。下手したらただのバカか…？ま、俺の気にする問題じゃないけど。

こうしてガルマは俺達の部屋を嬉々として去って行くのである。

その夜の事である。俺はシャアに対して持っていた最大の疑問を、直接彼に問う事にした。俺の想像通りであれば、こいつはかなり物騒な事を考えていた。

「しかし、昼間の件だけだな。はつきり言って腰抜かす程驚いたさ。」

「私がジオン・ダイクンの遺児であるという事か？まあ君なら大丈夫だと思うが、決して口外はしないでくれよ。」

「勿論さ。……なあ、シャア。何故お前はわざわざサイド3に戻って来たんだ？」

「……！それを聞いてどうすると言っただけ？」

シャアの視線が鋭くなるのを感じる。こりゃクロだな。

「ザビ家への復讐だとか、バカな事を考えてるんじゃないかって思っただけさ。」

「……君の洞察力は大したものだな。騙せないなら否定は出来ないな。」

「はつきり言ってしまうえば、別にお前が何を考えていようが俺は知ったこっちゃない。だけど、偶然とは言え俺はガルマと知り合ってしまった。アイツを騙すのは、いかなものかって、思ったただけだ。それに、別に俺の洞察力だとかは関係ないさ。あんだけ詳しく話を聞けば誰だって思い付く。」

「私をザビ家に売るか？」

「それも良いかもな。だが生憎、俺は出世だとかあんま興味がない。それにな、お前の企みはガルマに出会ってしまった時点で、既に失敗しているんだよ。」

「何故そう思う？」

「ガルマとお前は、お互いを親友だと心から思っているからな。やるんなら20年ぐらい経ってから、ガルマを擁立してクーデター起こすぐらいにしとけよ。」

「ふ、その時は君にもご助力願うかな？」

「今日の入学式で、初めてギレン・ザビの生身の姿を見た。あいつの事は正直好かん。20年後まで覚えていたら付き合ってやるよ。それまでは素直に、ジオンに奉公するんだな。」

「……ご忠告、ありがたく受け取って置くとするよ。」

シャアとタクマ、そしてガルマは今後、親友として、生涯に渡って付き合う仲になる。

そしてシャア・アズナブルがタクマに対して見方を改めたのは、まさしくこの瞬間であったという。

ジオン士官学校編2（後書き）

書き始めたは良いけれど、はっきり言って構想とかちゃんとまとまってる訳ではありません…。

ちゃんと完結出来るか今から不安（笑）

次ぐくらいからモビルスーツ出せるかな？

ジオン士官学校編3

俺が士官学校に入学したU・C・0073の1年は、俺にとっても、また、ジオン共和国にとっても激動の1年であつたと言えた。

まず、このジオン共和国。

そもそもジオン共和国ではなくなつてしまつたのである。

以前から形骸化していたとは言え、とうとうサイド3は共和制から君主制に移行させ、【ジオン公国】と名乗る事となつたのだ。

共和国時代の大統領であつたデギン・ザビは、そのまま公王として、公国のトップに、呼称が【ジオン公国軍】と変わった軍の総司令官であるギレン・ザビは、総帥と名乗つた。

更に公国軍は、下に【宇宙攻撃軍】と【突撃機動軍】が設けられた。司令官はそれぞれドブル・ザビ、キシリア・ザビが就く事になる。

俺が士官学校に入学した時、定員数が大幅に増えていたのだが（そのお陰で俺も入学出来ていた訳だが）なるほど、そういう理由があつたんだなと納得する。

これで明らかなるザビ家の独裁体制がジオンに置いて確立してしまつた訳であるが、そもそもサイド3をここまで発展させたのがザビ家であるのは明確な事実であるため、そこまで民衆の支持は下がる事はなく、むしろ熱狂的な支持者層に厚みを掛けるきっかけになつていた。

ちなみにこの時はまだ家族と頻繁に連絡をとっていて、親父はジ
オンの社会情勢を危惧し、一度俺に「帰国しないか」と言った事も
ある。

しかしそれなりの決意を持ってサイド3にやって来た俺にとって、
帰国するという選択肢を簡単に受け入れるつもりはなかった。

士官学校生活については、連日の訓練について行けない訳ではな
いが、やはり内容は過酷を極める。

思ったよりも反動がキツイ実弾射撃。銃をばらしてまた組み立て
直したりもした。

基礎体力作りのための訓練では、全部吐いてしまいうぐらい辛い時
もあったし、重い兵装を伴って行う行軍訓練は死にたくなる程嫌い
だった。

座学に関してはあまり問題はなかった。と、言ってもそれはルー
ムメイトであるシャアや、そのツテを持って知り合う事となったガ
ルマに協力を仰いだ事が非常に大きい。

奴らはやはりボンボンらしく頭の出来が良い。

俺は決して落ちこぼれとは言えなかったのだが、奴らに付き合っ
て勉強する事は俺にとってかなりのプラスであった。

基本的に俺はシャアやガルマとつるんで行動する事が多かった。

まず、シャアはああ見えてなかなか話せる奴だった。入学当初に
かなり物騒な考えをしていた事が判明していたが、今は学生生活を
単純に満喫する事にしたようだ。そしてそのシャアの行動に、事あ
る毎に首を突っ込むのがガルマである。

まあそんな理由で、3人で行動する事が多いので、1年も経つと、

それぞれを親友と認め合う仲にまでなっていた。

ちなみにガルマは、俺の進言通り偽名を名乗った。【ガルマ・ザラ】と言うらしい。これに関しては兄貴のドズルと一悶着あったらしいのだが、ガルマ特有の「お坊っちゃん精神」で貫き通したという話だ。

そう、ガルマは自身が「お坊っちゃん」である事を何気に理解していて、自身を有利にするために、それをあえて行使する事もある。意外と頭のきれぬ奴なのだった。

更に女性を口説かせるとガルマの右に出る者はいなく、時折り彼主催で開催される合コン（やつはあくまで「パーティー」だとかだった。）では、俺とシャアは結構イイ思ひ出を頂戴する事が出来たのである。ニシシ……。

U・C・0074に入る。

士官学校も無事優秀な成績で進級を果たした俺達は、ここで好きな専攻を選ぶ事となるんだが、俺は「パイロット専攻」を選択する事にした。

そいつを選んだ理由なんて簡単で、「カッコよさそう」だからである。

当時17才である俺にとって、パイロットというのは非常に甘美な響きを与えてくれる訳だ。

整備や管制も選ぶ事が出来たのだが、シャアとガルマもパイロット専攻に進む事、教官にもパイロットを勧められたため、俺は特に

ちゃんと考える訳でもなく、パイロットを選択したのだった。

U・C・0074は、「チベ級戦艦」の配備や、揚陸専門の「ジオン海兵隊」が設立された。これは明らかに侵攻を意図した部隊であり、ジオンは急速な軍拡を続けていた。

それは年々締め付けが厳しくなっている、地球連邦への対抗策であつたのだらうと推測出来る訳であるが、それでも俺は、上層部が本気で戦争を仕掛けるつもりではないとタカをくくっていた。

勿論それは俺だけの考えではなく、世間一般での反応も似たような感じだった。

この年の主要な出来事と言えばそんな所であり、俺は訓練と、たまの休暇での遊びに明け暮れていた訳である。

そして突入したU・C・0075だ。

まず春先、衝撃的な出来事があつた。

親父と母さんが離婚した、という連絡を受けたのである。

どうやらこの年に入って、親父は仕事の関係で移民が始まってすらない、【サイド7】に転勤する事になったらしい。

親父はいつも通り、また家族で引越すつもりであつたらしいのであるが、ここで反発したのが母さんである。

親父はアムロにコロニーの建設現場を見せたかったらしく、あくまで家族で引越す事にこだわった。

しかし母さんには、もう許容出来る範囲ではなく、急速に関係は冷え込み、意外とあっさり離婚が決まってしまったらしい。

ショックと言えばショックであるが、俺は転勤の度に母さんと親

父が喧嘩をしている姿を見ていたため、いつかこうなるのではないかという予想は、出来る事だった。

アムロは親父に引き取られてサイド7に移住し、母さんは地球に降りた。という事だった。

俺が家族と一緒にいれば、何か違う結果も望めたかもしれないが、それは仕方がないと心に整理をつけるしかなかった。

そして、パイロット専攻であつた俺にとって最大の出来事と言えば、運用艦艇である【ムサイ級巡洋艦】と共に、かねてより噂されていたロボット兵器【MS-05ザク】の配備がとうとう始まつた事だろう。7月の事だった。

11月には教導大隊の発足と共に、士官学校にも相当数の教習機が配備され、俺達パイロット専攻の人間は、このザクの操縦訓練が中心となつた。

この新兵器はモビルスーツと呼称するらしいが、これが新兵器と呼ぶ程大層なモノなのか、とむしろ疑問に感じる事が多かった。

兵装の105mmマシンガンや、280mmのバズーカ、そして近接格闘用のヒートホークと多彩で強力ではある。

しかし、このでかすぎる図体からして、連邦の艦艇や戦闘機から、精密な誘導ミサイルをこちらの射程外から喰らえば一発終了であるのは疑いようもなく、こんな代物が戦争で使える訳がない。

なるほど、やはり上層部は本気で戦争をする気ではないだろう。これも恐らくはジオンの技術力の高さを対外的にアピールし、抑止力に期待しているのだらうと判断する。

ちなみに俺の操縦技術は、自分で言うのもアレだがなかなか優れているらしい。

らしいって言うのは、俺の身近にはシャア・アズナブルというアホがいたため、いくら教官や周りに誉められようとも、あまり実感が沸かなかつた。という意味である。

奴は何事も飲み込みが早く、ザクの操縦も、瞬く間に自身の手足のように扱えるようになったのである。

シミュレーターのスコアで、彼は教導隊教官のエリオット・レム中佐を抜き去ると、常にシャアは断トツでトップを走り続けて、その後ろで俺とガルマが僅差で抜きつ抜かれつ、を繰り返すような感じであつた。

その時俺は「天才ってホントにいるんだなー」だなんて、呑気に考えていた。

しかしながら、俺とシャア、ガルマはそれぞれ互いに良きライバルだと認め合い、プライベートでもしょっちゅう遊んだ思い出が今でも残っている。

士官学校での3年間は正にあつという間に過ぎ去つた。

そして迎えたU・C・0076

俺は10傑に入る優秀な成績で士官学校を卒業する事が出来た。勿論首席はシャアであり、次席にガルマであつた。

ま、俺は実技は優秀であつたと認められたのだが、座学で引き離された感があつた訳だつた。

そして俺は、キシリア・ザビの突撃機動軍に所属するMS中隊に配属となり、月面のグラナダへ赴任する事となる。

ジオン士官学校編3（後書き）

ご指摘頂いた誤用を修正して、再々投稿を行いました。

開戦前夜編 1

【グラナダ】は月の裏側に位置する、公国軍の一大拠点である。

ジオン本土であるサイド3から一番近い基地であるグラナダは、MS工廠も置かれていて、現在は新設されたばかりのMS部隊に供給される「ザク」をフル稼働で生産を続けているという事だ。

士官学校卒業後に少尉に任官した俺は、このグラナダに配備されるMS中隊へ配属となり、ムサイ級巡洋艦「ニールベルグ」に所属するMS小隊の小隊長を拝命した。

ま、いくら士官学校出のエリート候補生とはいえ、こんなものだろう。出世にはあまり興味はなかったが、とりあえず現状に満足しとくとする。

ちなみにシヤアはドズルの「宇宙機動軍」に配属され、現在は建造途中の宇宙要塞である【ソロモン】へ赴任した。

ガルマはギレン直属の親衛隊に配属となり、本国のサイド3に「ガルマ・ザビ」として赴任して行った。どうやらやつのモラトリアムはここに終焉を迎えたらしい。

そして俺の部下として配属されたパイロットの面々の紹介しておく。

タカヨシ・アベ曹長

27才の彼は、ガトル戦闘機からMSパイロットに転向した人間で、軍歴は俺の小隊では一番長い。「タカさん」と呼ばれ、周囲にも慕われる温和な性格の人間であり、彼には小隊の副官を務めて貰った。

ユウジ・フオツカー伍長

20才で、こちらもガトル戦闘機からの転向組である。「MSの腕は一流半でもベッドの上では超一流」とは彼の弁であり、つまりはこーゆうやつである。

ウオズ・シミズ伍長

18才。元は整備兵志願者であつたらしいが、適正検査でパイロットに向いているとされ、半ば強制的にMSパイロットとなった変わり種である。小隊内唯一のタメであり、話の合う良い奴であつた。

以上。

そんな訳で俺の小隊は全て日系人に統一されていた訳であるが、これは人事部の配慮であり、他の部隊も人種系統毎の、似たような構成になっているらしい。

ちなみに「ニールベルグ」の艦長も東洋人で、ヤン・ウェンシー少佐といった。将来を嘱望された逸材であるという話だ。

新任小隊長に過ぎない俺が、最年少であつた事に最初は困惑もしたのだが、MSの腕は認めて貰つていたし、軍務以外のプライベートルでは、あえて「タクマ」と呼んで貰い、階級を気にする事を厳禁とさせたのもあつて、特に小隊内に不和が発生する事もなかった。特に副官であるタカさんは、俺に対して助力を惜しまなかった。軍務関係でもプライベートでもかなり助けて貰つたし、彼にはほとんど頭の下がる思いで一杯だ。

さて、このU・C・0076に置いては、俺達の主な任務は、艦隊演習や哨戒任務がほぼ全てであり、正直毎日が気楽であつた。

俺は戦争なんかあるはずがないと、かなり本気で思つていたし、一部の右翼系の思想に染まつた奴以外は、この意見がほぼを占めていた。

ところがこの考えは、ちょっと甘かつたのではないかと、だんだん俺の考えが変わつて来たのはU・C・0077に入ってからである。

この頃から艦隊演習が、【ミノフスキー粒子】と呼ばれる微粒子の散布下で行われる事が前提となつた。

ミノフスキー粒子自体は、核融合に必要な物質であり、ザクや宇宙艦艇のジェネレーターに広く用いられているのは常識であつたの

だが。

そう、まだこの時、ミノフスキー粒子が、レーダーやセンサーをほぼ無効化してしまう側面を持っているなどは、誰も知らなかったのである。

そもそもMSは、近接格闘用の兵器としての運用が基本であり、敵の艦隊陣に飛び込んで、直接攻撃を行うのが、最も効果的な運用法であると考えられていた。

問題があつたのは、その接近するまでである。

従来の常識で言えば、敵艦艇に取り付く間もなく、レーダー連動の精密射撃や、誘導ミサイルにMSは撃破されてしまうはずであつたのだが、戦域にミノフスキー粒子が大量散布された状態であると、その常識が覆されてしまう訳である。

恐らく連邦艦隊も統率が取れなくなり、かなりの混乱を呼び起せるのであろう。

このミノフスキー粒子の持つ側面は、関係する全軍で最重要機密とされ、MSによる対艦戦闘のマニユアルが完成するに至ると、俺は、現実に戦争が近付いて来ていると思わざる得なかったのである。

しかしながら俺に出来る事と言えば、戦争に備えるべく、今まで以上に演習や模擬戦に力を入れ、他の隊員を鼓舞させる事ぐらいしかなかったのだが、どうやら上層部にその努力は認めて貰っていたらしい。

ニールベルグのMS小隊は精鋭として認められ、U・C・0077の終わりに俺は中尉に昇進し、部下達も各々1階級昇進した。

更に俺は、所属するMS中隊で、副隊長に任命されるのである。ちなみに中隊長はジェラルド・サカイ大尉であった。

その時、俺は認められたという嬉しさが大きく、不安に感じていた部分は、どこかに放り出してしまっていた。

U・C・0078に入ると、早くも「ザク」の後継機である「MS-06ザク？」の配備が始まった。

従来のザクでは、どうしても耐久性に問題があり、対艦戦闘には向かないという判断が下されていた。

その点、ザク？は、連邦艦艇の近接防御機関砲ぐらいでは問題にならないぐらいの重装甲を持ち、基本兵装のマシガンは従来の105mmから120mmにボアアップされている。

とゆうか、マシンガンに装填する弾薬は、基本的に徹甲榴弾であり、それがマシンガンとして連射されるので、こいつは実際に恐ろしい破壊力を持っているのだ。果たしてこんなモノをマシンガンと呼称して良いのか正直疑問である。

いつかこいつを、連邦のサラミス級やマゼラン級の艦橋に直接ぶち込む事を考えると、連邦のブリッジ要員の方々が不憫でならない。

いや、まだ戦争が始まった訳ではないんだけどね。

ザク？は生産台数が整う毎に、続々とMS隊に往き渡って行った。当初ニールベルグに配備されたザク？は、俺の搭乗する指揮官機のみであったのだが、その3日後には小隊員全てにザク？が配備されるという、超スピードな生産ぶりである。

ま、実際ニールベルグは精鋭として認められていたので、恐らくは優先して回してくれたのだろうとは推測出来るのだが。

しかしながら、ここまで生産スピードが早いと、「ちゃんと作ってんの？」ぐらいの事を考えたりもしたのだが、全部隊を照らしても、ザク？の初期不良品は0.5%にも満たない優秀振りを発揮し、整備性も良好で、精密機器とは思えない程の稼働率であった。なおかつ、ある程度なら自由にカスタマイズ可能というスペックの拡張性すら備えていた。

こいつを製造したジオニック社は良い仕事をしたと言わざるを得ない。

最初はそのザク？の性能に、俺もみんなと一緒にになって惚れ惚れしているだけであった。

しかし俺は、戦争が足音を立てて確実に近付いて来ている事に気付いてしまうと、なんだか手放しに喜べない現実もあった。

何故なら更なるMS部隊の増設は続き、グラナダでは、地球侵攻を前提としたMSの開発まで行われている噂を耳にしたからである。

ついでに述べるとすると、例えば旧ザクがロールアウトした時は、ジオンは大々的に「ザク」の宣伝を地球圏に対して行なった。

しかし、今の愛機であるザク？を初めとした機体や、グラナダでテストを行なっている新型機は全て秘匿とされている。

上層部は間違いなく本気なのだ……。必ず近い内に地球連邦に対して宣戦を行うつもりだ。

そして、それが確信となったのは、U・C・0078の11月の事だった。

その日、「ニールベルグ」のMS小隊に、新型が1拳4機も支給されたのである。

「MS-06C？ザクの改良型であるのはわかるけど、どこが違うの？」

使用書を縦読みしながら、補給部隊の整備士に聞いてみると、驚くべき答えが帰って来た。

「もう一枚装甲が重ねられて、更に耐久性を上げた機体です。後は

「コクピット周りと、電子兵装、動力部に耐核防御が施されています。」

「ふーん……………え、マジで？」

「はい、マジです。」

整備士も、俺の言わんとする意味を理解しているようであった。

耐核防御が施されている時点で、それは核使用を前提にしていると同義である。恐らく連邦艦隊に奇襲して、核をぶっ放すつもりなのであろう。

「やれやれ、こりゃ開戦もいよいよかな？」

「さあ……小官は宅配を届けに来ただけなんですなとも。」

整備士は気まずそうに下を向いているだけである。

「中尉ー！新型が届いたってホントですか？？」

その時、噂を聞きつけてやって来たのはウオズ曹長であった。

「ああ、ウオズ。ほら、これが使用書だからしっかり読んでおけよ。」

「あ、はい。どうもです。」

「それでは、小官はパプワに戻りますので、失礼します。」

「はいよ。ご苦労さん。」

整備士はここぞとばかりに逃げ出した。これ以上人が集まって質問責めに合うのは酷だからな。気持ちはわかる。

「……中尉。これ、マジですか？」

「ああ、マジだ。」

俺は、いよいよ戦争を覚悟した。

開戦前夜編 1（後書き）

いよいよ、今回は「開戦編」でございます。

開戦前夜編 2

《U・C・0078・12》

10月の【国家総動員法】の成立、更に11月には我が部隊へ耐核使用のザクの配備と、公国軍は連邦への戦争準備を着々と進めていて、それは現場にいる末端の兵士達にも「覚悟」という形で表れてくる。だが……

ま、12月も後半に差し掛かってくると、やはりどいつもこいつも頭の中はクリスマスの予定を埋める事で一杯になってくるらしい。特に西洋系の人間の多い部隊なんかはキリスト教徒がかなり多いので、家族と過ごしたいがために休暇申請が殺到し、毎年司令部の頭を悩ませる時期なのである。

おかげで日系人が多い我が部隊はその煽りを喰い、必ずと言って良い程クリスマスは待機任務が下される訳である。

ま、別に俺らにとってクリスマスというのは、カップルがいちゃつくための1日ぐらいにしか思っていないので別に構わなかった。そしてその分、我々は正月に休暇が貰える訳だしね。

しかしながらクリスマスに単純な待機任務で終わらせるのも、季節の行事を律義に行う我ら日系人として風情がないので、夜は小隊の面々で簡単なパーティーを行なった。もちろん勤務中であるので

アルコールは抜きだ。

その中で既婚者であるタカさんなんかは、こんな事を言っていた。

「クリスマスに勤務していた方が、嫁にとっちゃ安心らしいんだよ。浮気される心配がないってさ。」

しかしそれは、奥さんの方が自由に動けるので、逆に浮気されるんじゃないか？とユウジが突っ込むと、タカさんは「むむむ……」と頭を抱え始めていた。何か覚えがあるんだろうか？

「ユウジ、あんまりタカさんいじめるなよ。」

「いやいや、隊長。ユウジさんは去年のクリスマス、女に振られてますから。」

「こらウオズ！人がせつかく忘れかけていた事を！」

ウオズがユウジにとって痛い思い出を深くえぐる。

ユウジは、今年のクリスマス直後に「本気だった」という彼女にふられたのだった。

「そう言えばタクマ、聞いたか？ヤン艦長の事。」

「ああ、タカさん。ヤン艦長ったら、あの堅物編成部長にめずらしく文句言ったらしいね。」

「ニールベルグ」艦長であるヤン少佐は最近、ブロンド美人な奥さんと結婚したばかりであり、流石に今回のクリスマスは休暇が欲しかったらしい。

彼は意外と恐妻家であり、新婚家庭のくせに、既に家では尻に敷かれていたという話を聞いた時には思わず笑ってしまった。

「隊長、そんな人の事ばっか気にしていて、肝心の自分の事は良いんですか？」

「ウオズ、いいかよく聞け。それはな……。」

「それは？」

「聞いちゃいけないお約束だ。」

他人の不幸は蜜の味。しかしそいつは自分の事を全て棚に上げる事で成立する。なんか文句あるか。

パーティーの後片付けを済ませると、夜間の哨戒任務へと向かう。これが終わり、引き継ぎを持って我々は休暇のためにサイド3に戻るはずだった。

そう、戻るはずだったのだ。

相変わらず異常のひとかけらも存在しない夜間の哨戒を終えて、任務終了を報告しに「ニールベルグ」の艦橋へ上がると、出迎えてくれたのはヤン艦長のしかめっ面であった。

「報告します。定時哨戒は異常無しです。」

「ああ、タクマ中尉か。お疲れさま……。」

「はあ。ヤン艦長、如何なさいました？」

聞かずにはいられない程、ヤン艦長の様子はおかしかった。

「ついさっきね、司令部から命令が届いたよ。ニールベルグは明朝0630を持って出撃だ。」

「出撃ですか？まさか……。」

「そのまさかで恐らく間違いないだろうね。開戦だ。」

引き継ぎの準備どころではなくなったらしい。休暇を楽しみに待っていた小隊の面子の事を考えると、頭が痛かった。

《同月27日未明》

ダニガン中将率いる公国軍第2基幹艦隊の主力はグラナダを出立。極秘に先行していたフレイヴァー大佐の分艦隊と合流すると、その進路をサイド2方面へと定める。

また、その分艦隊の一翼の中には、「ニールベルグ」の姿もあった。

タクマは、所属するMS中隊の旗艦であるチベ級重巡洋艦「アースグリム」にいた。

艦隊の合同ブリーフィングに出席するためである。

なお、チベ級は先の【グワジン級大型戦艦】の就航により、その艦種を戦艦から重巡洋艦に変更されていた。また、MSの登場により早くも老朽化が始まっていたチベ級には、ほぼ全ての艦に近代化

改修が施され、MSの搭載能力も付与されている。

そのため、隙間に埋め込まれたようにムサイ級は軽巡洋艦と艦種が変わっていた。

「では、作戦を伝える。」

壇上に立つのは、「アースグリム」の艦長であるファールン中佐である。この作戦に置いてタクマのMS中隊は、その母艦群と共に1戦隊を構成していた。

「既に知っていると思うが、現在我が艦隊はサイド2に向けて進撃中である。サイド2到着の予定は翌年の1月3日。艦隊の展開完了を持って、公王府は地球連邦へ宣戦布告を行う予定だ。そこで、我が艦隊は間髪を入れずにサイド2守備艦隊に奇襲攻撃を敢行し、各バンチの制圧を行う。一先ずの所、我が戦隊への指令は、連邦守備艦隊への攻撃の先陣を切る事、そして別動隊による制圧行動の支援だ。」

タクマは、ファールン中佐の「一先ずの所」で区切った言葉に違和感を覚える。

この作戦はサイド2の制圧だけでは終わらないのだろう。

続くファールン中佐の言葉は、ここに集まる全ての士官を驚愕させた。

「なお、作戦の最終目標は連邦軍総司令部、ジャブローヘコロニーを落とす事だ！我が戦隊は遊撃艦隊として機能する事となる。以上、質問はあるか？」

ブリーフィングルーム内の士官達は、その内容を理解出来ず、しばらく押し黙るだけであった。

しかしたまらず1人の士官が拳手し、質問を行う。

「……コロニーを落とす。という事は、聞いての通りでしょうか？」

その士官の質問は、軍議の場に置いて要領を得ないものであったが、この場に集う士官全員の総意でもあった。

「その通りだ。既に移送用の核パルスエンジンも用意してある。我々はサイド2コロニー群の1基を奪取し、それをジャブローへ落とすのだ」

途端にブリーフィングルーム内はざわめきに包まれる。

士官達は、先程のファーレン中佐の言葉が、タチの悪い冗談で無かった事をようやく理解したのだ。

「……質問はないな？この作戦は以後、【ブリティッシュ作戦】と呼称する。この作戦の成否が、我がジオン公国の命運を握ると言っても過言ではない！各員の奮闘に期待する。それでは以上解散！」

その言葉と共に、ファーレン中佐は室外へと退出して行った。一度は落ち着いてた室内であったのだが、再び喧騒とも言えるざわめきが包み込むのであった。

「サカイ大尉、随分と落ち着いてらっしゃいますね？」

「ああ、俺は事前に作戦の全容を知っていたんでな。お前こそ余裕そうだな？タクマ」

「正直呆れていますよ。しかし国力が連邦の1/30にも満たない我々が本気で勝つつもりなら、これぐらいの事をしなきゃならないでしょう。それは理解出来ます」

「しかし、そのために何億という人間を虐殺する事になるんだろうな。果たして後世の人間に、我々の行いはどう映る？」

「……サカイ大尉、味方を怖がらせてどうすんですか。我々は上の命令に一切逆らえない単なる軍人に過ぎません。やれと言われたらやるしかありません。ただ、1つだけ問題があります」

「なんだ？」

「地球の日本には母がいるんです。母親を手には掛けないためにも、必ずコロニーはジャブローに落とさなくてはなりません。」

「……そうか」

公国軍第2基幹艦隊は、大軍を持ってサイド2へと進軍を続ける。時を同じくして、ドブル中将率いる第1基幹艦隊も、サイド1、及びサイド4へと進軍を開始した。

連邦のパトロール艦隊は、ミノフスキー粒子の影響もあって、この公国軍の動きを正確に察知する事は不可能だったのである。

そして迎えるU・C・0079の1月3日、宣戦布告と共に、公国軍はサイド1、2、4に奇襲攻撃を敢行する。

後に言う【1年戦争】の幕開けであった。

開戦前夜編2（後書き）

結局開戦まで辿り着けなかった……。

てかここまですとタクマがアム口の兄である必要性が一切ない事に気付いて若干orzな私。

ほぼ思い付きと勢い、構想なんかほとんどしてないまんまの見切り発車が悔やまれます。

次こそ【ブリティッシュ作戦編】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7965k/>

機動戦士ガンダム0079 - 宿命の双星 - （仮題）

2010年10月10日12時13分発行